東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

忘れられていた詩人リュッケルトの多面性：『子供の死の歌』に表れた1つの面

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-12-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/906

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

忘れられていた詩人リュッケルトの多面性
―『子供の死の歌』に表れた一つの面――

渡 辺 国 彦

リュッケルト（Friedrich Rückert 1788-1866）については、その業績や人生のあらましはもとより、その存在すら、あまり知られているとは言えない。ドイツ文学を専攻する者でさえ、このような状況はあまりかわらない。もしかすると、音楽の愛好者や専門家のほうが、シューベルト、シューマン、リヒャルト・シュトラウスやマーラーの歌曲のおかげで、我が国では、リュッケルトの名前に親しんでいるのかもしれない。もちろん、これらの歌曲で親しまれている詩は、１万を超えるリュッケルトによる詩のごく一部にすぎない。さらに言うならば、詩人としての創作活動とならぶリュッケルトのもう一つの柱である言語学や翻訳をはじめとした彼の東洋学者としての幅広い活動が、現代において広く認められてはいない。

これを裏付けるように、リュッケルトについては、ドイツ文学史の書籍にさえ、残念ながらほとんどスペースが与えられていない。それは、日本だけではなくドイツのおいても同様である。たとえば、『ドイツ文学史』（Deutsche Literaturgeschichte）全 12 巻をみてもリュッケルトについての主な記述は、その第５巻『ロマン派』（Romantik 総ページ数 448 ページ）のうちのわずか１ページと 11 行があてられているだけである。[1] このような文学史の説明では、リュッケルトの持つ限られた一面の紹介にすぎず不十分であるのは、あきらかである。1814 年頃に作られたリュッケルトの若いころの作品が、この詩人、いや詩人とよぶにはあまりに多面的なこの人物を説明する材料として使われている。

Ihr Deutschen von dem Flutenbett des Rheines,
ライン川の大河の川床から
Bis wo die Elbe sich ins Nordmeer gießet,
エルベ川が北海に注ぐところにいたるドイツ人たちよ、
Die ihr vordem ein Volk, ein großes, hießet,
お前たちはかつてひとつの民族、偉大な民族と称していた、

1　Erika und Ernst von Borris: Deutsche Literaturgeschichte. Band 5. Deutscher Taschenbuch Verlag. München. 2003. S.398f.

Was habt ihr denn, um noch zu heißen eines?
まだひとつの民族と言うために、お前たちはいったい何を持っているのだ。

Was habt ihr denn noch großes allgemeines?
お前たちはいったいまだ偉大な共通のものを持っているのか。
Welch Band, das euch als Volk zusammenschließet?
どのようなきずながお前たちを民族としてつないでいるのか。
Seit ihr den Kaiserscepter brechen ließet,
お前たちが皇帝の笏を折らせ、
Und euer Reich zerspalten, habt ihr keines.
お前たちの王国を分裂させて以来、お前たちはなんのきずなも持っていない。

Nur noch ein einziges Band ist euch geblieben,
かろうじて一つのきずながお前たちの残っていた、
Das ist die Sprache, die ihr sonst verachtet;
それはお前たちがいつも見下している言葉である；
Jetzt müßt ihr sie als euer einziges lieben.
今お前たちは言葉をお前たちのただ一つのくびきとして愛さなければならない。

Sie ist noch eur, ihr selber seid verpachtet;
言葉はまだお前たちのものである、お前たち自身は貸し出されているが；
Sie haltet fest, wenn alles wird zerrieben,
もしすべてがすりつぶされても、言葉は保持している、
Daß ihr doch klagen könnt, wie ihr verschmachtet.[2]
いかにお前たちがやつれ果てているかを、お前たちが嘆き訴えることができることを。

詩は、『甲冑をつけたソネット』（die Geharnischeten Sonette）からのものである。ナポレオンの軍隊の進行により、ナポレオンに与するドイツ内の諸国によってライン同盟が成立した。いわば、ドイツはフランスに「貸し出された」のである。たとえ形式だけのものになっていたとはいえドイツを「ひとつのもの」にまとめていた神聖ローマ帝国が名実ともに解体した後の政治的な状況にあって、愛国主義の高まりを反映した政治的な主張を持った詩をリュッケルトは書いた。感激した愛国詩人フーケ（Friedrich de la Motte Fouqué 1777-1843）は、リュッケル

2　Friedrich Rückert: Friedrich Rückerts Werke Histrorisch-kritische Ausgabe. Werke 1813-1816 I. Wallstein Verlag. 2009. S.85

トのソネットにロマン語圏を原型とするその手本から解放されたドイツ独自のソネットの形式を認めようとした。そのソネットは『完全な戦いの鎧』を着て……現れたと」[3]。内容も形式も敵国に対抗する鋼の強さが、ドイツのソネットには必要であると、フーケは主張している。

「神聖ローマ帝国」というドイツ統一のシンボルが失われた今、フランス語を愛好する教養ある階級に「見下されて」いた言葉ドイツ語だけが、占領と解放戦争の時代におけるドイツ統一の「ただひとつのくびきである」。ボリスはさらに、リュッケルトのこの詩に関連付けてグリム兄弟によるドイツ語研究との精神的なつながりについて、完成まで 123 年間の月日を費やした全 16 巻 33 冊の大著『グリム兄弟によるドイツ語辞典』(Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm) の序文にあるヤーコプ・グリムの文章を引用している。この辞典の編纂は、学問的な興味とドイツ民族の母国語への受容の幸福な出会いであるというグリムの主張を述べた有名な個所である。「このふたつは、祖国への強められた愛と祖国へのよりしっかりした統一への消すことができない欲求によって動かされた」[4] と。それは、ドイツの民謡、ドイツの民話や伝説、神話など、そしてドイツ語それ自体が、ドイツ民族のアイデンティティとして、脚光をあびた時代である。

ボリスのリュッケルトへの記述はこのように愛国詩人についてのみしか述べられていない。しかし、リュッケルトの全体像を理解しようとするならば、先に述べたように、このような文学史の記述は、はなはだ不完全である。この詩にあるように若きリュッケルトがドイツ語という言葉に思想上最大の価値を認めたのは確かであるが、ドイツを超えた言語、思想への愛着が彼の本質であるからだ。リュッケルトの生涯をたどってみるならば、愛国詩人としてのリュッケルトは、東洋をはじめとする多くの言語をあやつり、多数の翻訳書を出版し、東洋の詩の技法に通じた世界詩人たるリュッケルトという多面体のひとつの面にすぎないことが、容易にわかる。ここで、あまり知られていないリュッケルトの生涯を概観してみよう。[5]

1787 年

7 月 14 日にシュヴァインフルトでリュッケルトの両親が結婚。宮廷法律家ヨハン・アダム・リュッケルトと、法律家の娘マリア・バルバラ・ショッパハである。

1788 年

5 月 16 日シュヴァインフルトでリュッケルトが生まれる。ヨハン・ミヒャエル・フリードリヒの名で洗礼を受ける。

シュヴァインフルトで 1790 年にリュッケルトの唯一の弟ハインリヒ（1818 年没）、1791 年に妹ザビーネ・ゾフィー（1848 年没）が生まれる。

3　Erika und Ernst von Borris:　S.398.

4　ebd.　S.399.

5　リュッケルト協会のサイト http://www.rueckert-gesellschaft.de/rueckert-frame.html　および Friedrich Rückert Gedichte. Phillip Reclam jun. Stuttgart. 2005. S.305ff. 等を参考にする。

1792 年－ 1802 年

リュッケルト家はオーバーラウリンゲンに引っ越す。オーバーラウリンゲンでリュッケルトの妹たちアンナ・マルダレーナ（1793-95）、エルネスティーネ・ヘレネ（1795-97）、ズザンナ・バルバラ（1797-1801）が生まれる。フリードリヒ・リュッケルトは村の学校ならびに牧師のところで授業を受ける。

1797 年

11 月 17 日に、後にリュッケルト妻となるルイーゼ・ヴィートハウス＝フィッシャー（1857 没）がバイロイトで生まれる。

1805 年－ 1809 年

ヴュルツブルク大学で父の希望で法律学の学生として登録、半期だけ法律学を学ぶ。その後、文献学と哲学に転向。

1806 年－ 1807 年

リュッケルトは法律学の傍らで『ギリシア神話』と、(1807 年には)『自然哲学』を受講する。

1807 年－ 1809 年

リュッケルト家は、父親の任務するゼスラッハに住む。夏休みにリュッケルトはここで最初の詩集を執筆する。1807 ／ 08 年の冬学期にヴュルツブルクでヘブライ語の講義を受ける。

1808 年

春学期（４月 13 日から）をハイデルベルクで、『憲法』を受講するが、同時にハインリヒ・フォス（1751-1826）のところで『韻律』を学ぶ。

1809 年

リュッケルト家は、エーベルンに居を構えた。リュッケルトは、後にも 1821 年まで何度も訪問する。

1810 年

11 月 15 日にエーベルンでリュッケルトの一番下の妹マリア（1835 年没）が生まれる。年末にリュッケルトは弟ハインリヒ（1790-1818）とともにイェーナに行く。

1811 年－ 1812 年

イェーナで学位授与試験。それに引き続き学術的な論争。そこでリュッケルトはギリシアの精神生活の東洋的起源を示唆した。1811 ／ 12 年の冬学期では、イェーナで私教師。ツィクルス『４月の旅の書状』が成立し、彼は最初の戯曲（『ラウエネック城』）の試みに従事する。ヨハン・クリスチャン・フリードリヒ・シューバルトとの交友。

1813 年

ジャン・パウル（1763-1825）、ハインリヒ・フォス、フリードリヒ・デ・ラ・モッテ・フーケ（1777-1843）、グスタフ・シュヴァープ（1792-1850）等と交友を持つ。ナポレオン支配に反対する『甲冑をつけたソネット』、12 月には『妹を寝付かせるための５つのメルヒェン』が成立する。

1814 年

『甲冑をつけたソネット』がハイデルベルクでフライムント・ライマーという匿名で出版される。

1817 年

彼の友人であり銅版画家であるカール・バルト（1787-1853）との生涯にわたる友情の開始。『イタリア詩集』が出版される。

1819 年

プラーテンとの交友。

２月にリュッケルトはエーベルンの両親の家に帰郷。アラビア語やペルシャ語圏で人気のあるガゼールという詩の形式を取り入れた最初の詩集が成立する。エーベルンでリュッケルトは東洋語の研究に没頭し始める。

1821 年

ルイーゼ・ヴィートハウス＝フィッシャーへの愛を、詩集『愛の春』で表現する。12 月 26 日にふたりは結婚する。

1822 年

ペルシャ風詩集『東方のばら』が出版される。

1823 年

リュッケルトの長男ハインリヒがコーブルクで生まれる。ハインリヒは後にドイツ文学者となる。(1875 年没)

1824 年

次男カール（後にコーブルクで医師になり、1899 年没）が４月 10 日にコーブルクで生まれる。

1826 年

２月 23 日に三男アウグスト誕生。アウグストは後にノイゼスの土地を管理することになる（1880 年没）。アラビアの古い即興詩形を用いた『ハラリのマカーメ』を出版。エアランゲン大学での東洋言語の正規教授に任命される。

1827 年

四男レオがコーブルクで生まれる。彼は農業経営者となる（1904 年没）。

1828 年

インドの国民的叙事詩『マハブハラタ』のリュッケルトによる自由訳（改作）『ナルとダマヤンティ』が出版される。

1829 年

１月４日に五男エルンストが生まれる（1834 年没）。この年詩集『村役人の息子の子供時代の思い出』が成立する。リュッケルトはインドのサンスクリット詩人ジャヤデーバの『ギーダゴービンダ』の訳を始める（1832 年に完成。初版 1837 年）。

1830 年

長女ルイーゼ誕生（1833 年没）

1831 年

8 月 31 日にシュヴァインフルトでリュッケルトの父が亡くなる。12 月にリュッケルトは「Schi-King」（孔子によって集められた中国の歌　1833 年出版）の訳を完結する。

1832 年

1 月 6 日に六男カール・ユリウス誕生。3 日後に亡くなる。新設されたチューリヒ大学がリュッケルトを教員として雇うことを希望する。

1833 年

リュッケルトの子供全員が猩紅熱を患う。幼い娘ルイーゼ（1830 年生まれ）が 12 月 31 日に亡くなる。

1834 年

1 月 16 日には 4 歳のエルンスト（1829 年生まれ）も亡くなる。リュッケルトは『子供の死の歌』（1872 年に出版）を執筆した。『詩集全集』第 1 巻が出版される。これは 1838 年まで 6 巻になる。

1835 年

6 月 24 日にシュヴァインフルトでリュッケルトの一番下の妹マリア（1810 年生まれ）が亡くなる。翌日エアランゲンで 8 番目の子である二女マリーが生まれる。12 月 31 日にリュッケルトの母がシュヴァインフルトで亡くなる。

1836 年－ 1839 年

リュッケルトの大教訓詩『バラモン金言』（Die Weisheit des Brahmanen）全 6 巻。

1837 年

七男フリッツが生まれる（フリッツは後に士官になり、1868 年に亡くなる。『東洋の伝説と話の物語の 7 つの本』。

1838 年

元旦にルートヴィヒ 1 世は、リュッケルトに聖ミカエルの王国功労勲章の騎士十字功労章を授ける。エアランゲンでペルシャ英雄叙事詩『ロステムとスーラプ』の翻訳を出版する。

1839 年

エアランゲンでリュッケルトの最後の 10 番目の子、三女のアンナが生まれる。ライプツィヒで『バラモンの物語』、シュツットガルトで『イエスの生涯、韻文での総合福音書』が出版された。

1841 年－ 1848 年

ベルリン大学の東洋言語学教授に任命される。戯曲『アルメニア王アルサケス』を完成する。新しい劇作品の成功という最初の希望（『サウルとダビデ』1843 年出版、『ヘロルド大王』1844 年出版、『皇帝ハインリヒ 4 世』1844 年出版、『クリストファー・コロンブス』1845 年出版）は、ベルリンでは満たされない。リュッケルトはベルリンでの生活になじめない。温かい季節に彼

はコーブルクのノイゼスで過ごす。1843 年に『王にして詩人のアムリルカイス』というアラビア語からの翻訳を出版、1845 年に『ハドゥモドの生涯』を、1846 年にはアラビア英雄民謡詩集『ハマザ』を出版した。1846 年冬学期にリュッケルトは病気の申し出をする。1848 年 3 月 17 日、バリケード戦開始の前日にリュッケルトは、ベルリンを去り年金生活にはいる。

1850 年

イランの詩人サアディーの『ブースターン』の翻訳。ペルシャ国民英雄詩でフェルドウスィーの『シャー・ナーメ』の翻訳。

1854 年

詩人フェーリクス・ダーン（1834-1912）との交友。

1855 年

著述家グスタフ・フライターク（1816-1895）がノイゼスのリュッケルトを訪問する。

1856 年

カーリダーサ（インドの古典文学で最も有名な詩人、劇作家）の『シャクンタラー』の翻訳。

1857 年

『アタルヴァ・ヴェーダ』（バラモン教の儀式の書）の翻訳。妻ルイーゼの死。

1866 年

１月 31 日リュッケルトはノイゼスの自宅で亡くなり、数多くの参列者の元で、２月３日に埋葬される。

このようにリュッケルトの人生を概観してみると、リュッケルトの多面性は、容易に想像がつくであろう。それにもかかわらず、東洋語中心とした 40 以上言語に通じ、アラビア、ペルシャ、インドなどの詩集や宗教書を翻訳し、東洋の詩形に影響を受けた詩や日常生活を題材とした詩のほとんどは忘れられたままであった。1998 年から出版が開始され 2013 年現在も継続している歴史的批判全集によって、歌曲によって知られている一部の詩やいくつかの出版社から手に入れることができるコーランの翻訳にとどまらないリュッケルトの全体像がようやくその姿を見せ始めている。リュッケルトの詩人としての評価も、その全体像が知られないまま、無視されるか低く見積もられていた。ある文学者が一般にどう判断されるかは、読まれる以前に、特定の文学史や権威など時代の流れの中で先入観に左右されてしまうことは少なくない。ハンス・マイアー（Hans Mayer）とペーター・ホルスト・ノイマン（Peter Horst Neumann）のリュッケルトに対する評価における対立の原因のひとつもそこにある。

ハンス・マイアーは、『グスタフ・マーラーと文学』（Gustav Mahler und die Literatur）[6] で、ロマン主義の哲学においては、音楽がすべての芸術的な手段のなかで、もっとも上位に位置

6　Hans Mayer: Gustav Mahler und die Literatur. Ein Denkmal für Johannes Brahms. S.146-161. Suhrkamp Verlag. 1993.

するとロマン派の詩人や哲学者によって繰り返し主張されているにもかかわらず、実際には、シューベルト、シューマン、ブラームスの歌曲においては、音楽と文学の同時代性が存在し、詩が音楽を支配していると述べている。「シューベルトの最後の時期のハイネ歌曲集は、比類なき成果だが、ただ奉仕しようとしているようにみえる（『パルジファル』のクンドリのように）」[7]。クンドリのように奉仕しているかはともかく、これらの作曲家が同時代の詩人の意図を最大限尊重し共有しようとしていたことは間違いない。ここで言う同時代の詩人とは、ゲーテ、ミュラー、ハイネ、アイヒェンドルフそしてリュッケルトなどであるが。

ところが、フーゴー・ヴォルフやリヒャルト・シュトラウスなどは、彼らが選んだ詩人はロマン派のエピゴーネンであり、詩人との同時代性は、見せかけのものになったとマイアーは述べる。詩人の視線は過去の失われた時代に向けられている。シェーンベルクに至って、詩は音楽への口実になる（シェーンベルクは後に方針を変更したとしても）。音楽的な着想の優位を基本定理とした音楽と詩との優位性の逆転である。シェーンベルクのエッセイによると、「私はシューベルトの歌曲を特にその内容を気にかけることなく、いつも音楽的な形象としてだけ読み解釈した」[8]。そして、「それから後、私がこれらの詩を読み終わったとき、私は詩を読んだことによって、これらの歌曲の理解には、まったくなにも得るものがなかったことが、よくわかった」[9] と自己の正当性を主張している。彼は作曲するにあたり、詩人の書いた言葉の最初の響きに陶酔するだけで充分であったという。マーラーも、抒情詩との関係において同時代性はない、しかしシェーンベルクともまた違った態度をとる。アドルノ（Theodor Ludwig Adorno-Wiesengrund）やエックブレヒト（Hans Heinrich Eggbrecht）からの用語を借りて、「簒奪的」（usurpatorisch）あるいは「非歴史主義」（A-Historizität）という言葉で、マイアーはマーラーの抒情詩への関係を説明している。バウアー＝レヒナー（Natalie Bauer-Lechner）によって伝えられたところによると「それは、私自身です」[10] とマーラーが告白した曲であるリュッケルト歌曲のひとつ『私はこの世に忘れられ』（Ich bin der Welt abhanden gekommen）が例として挙げられている。

Ich bin der Welt abhanden gekommen,	私は世間から忘れられている、
Mit der ich sonst viele Zeit verdorben,	彼らと私はかつて多くの時間を無駄にした、
Sie hat so lange nichts von mir vernommen,[11]	彼らは長い間私のことを
	何も耳にしていなかった

7　ebd. S.146.
8　ebd. S.148.
9　ebd. S.149.
10　Natalie Bauer-Lechner: Erinnerungen an Gustav Mahler, E. P. TAL a CO. VERLAG, 1923. S.167.（BIBLIOLIFE 社による復刻版）
11　Hans Mayer は vernommen を genommen として引用している。Hans Mayer: S.150.

Sie mag wohl glauben, ich sei gestorben.	彼らは、私が死んだと 思っているのかもしれない。
Es ist mir auch gar nichts daran gelegen,	彼らが私を死んだとみているかどうかは、
Ob sie mich für gestorben hält,	私にもまったくどうでもよいことだ。
Ich kann auch gar nichts sagen dagegen,	それになにも反論することはできない、
Denn wirklich bin ich gestorben der Welt.	なぜなら私は本当に世間から死んでいるからだ。
Ich bin gestorben dem Weltgewimmel,[12]	私は世間の雑踏から死んでしまった、
Und ruh in einem stillen Gebiet.	そして静かなところで安らいでいる。
Ich leb in mir und meinem Himmel,	私は私の中そしてと私の天空の中に生きている、
In meinem Lieben, in meinem Lied.[13]	私の愛の中で、私の歌の中で。

マイアーによると「簒奪」とは、マーラーがリュッケルトの詩句「私は私の中そして私の天空の中に生きている、」Ich leb in mir und meinem Himmel, を「私はひとり私の天空の中に生きている、」Ich leb allein in meinem Himmel, に変更したところに表れているという。

> 幻滅したロマン主義者リュッケルトは世間の雑踏の彼方、かろうじて「私の中そして私の天空の中（in mir und meinem Himmel）」に生きている。この甘い短い言葉「そして（und）」は、しかしながら、すべての内的世界を超越しなければならないなにかへの告白を意味している。神あるいは理想あるいは芸術として理解されるとしても：リュッケルトの場合すべてが互いに流れ込み、しかし、それは結びつきと私（das Ich）の庵からの離脱を意味している。マーラーはそれに対してこの結びつきと境界の解放を彼の（変更した）テキストにおいて拒否する。「私はひとり私の天空の中に生きている……」私は（das Ich）自身を世界にする：自分の愛と歌の中でも[14]。

マイアーは、他の文学作品においても、マーラーは、他人の詩を「簒奪」し、そのテキストの持つそれ自体の価値を無視し自由に処理することによって自分のテキストにしているという。それだからリュッケルトのような感傷的な抒情詩やアルニムやブレンターノによって自由に作り直された文学的な正統性に欠ける『少年の魔法の角笛』（Des Knaben Wunderhorn）さらに美術工芸品にすぎない『中国の笛』（Die chinesische Flöte）などの芸術的な価値の劣る作品を口実にしてマーラーは、自分を語ることができたのだと。

それに対して、ペーター・ホルスト・ノイマンは、著書『グスタフ・マーラーとフリード

12 Mahler は Weltgewimmel を Weltgetümmel に変更。
13 Friedrich Rückert Gedichte. Phillip Reclam jun. Stuttgart. 2005. S.117
14 Hans Mayer: S.151.

リヒ・リュッケルト――身分のつりあわない結婚？』[15]（Gustav Mahler und Friedrich Rückert - eine Mesalliance?）で、リュッケルトのような疑わしい詩を素材にしてマーラーが内容を「簒奪」することによってその芸術性を高めたのだというマイアーの主張に異議をとなえている。マーラーは、リュッケルトの詩を一級のものとして感じているのだから、その感傷的な内容の乏しい詩からリリシズムを追い出そうなどと試みたはずがないと。ここで、マーラーがいかにリュッケルトの詩に共感したかを示すために、バウアー＝レヒナーからの引用、『私の歌をのぞかないで』(Blicke mir nicht in die Lieder) は、マーラーがそれを詩作したかのように、テキストはマーラー的である。」[16] と『私はこの世に忘れられ』の「それは、私（マーラー）自身です」をノイマンは紹介している。だが、まったく同じ引用箇所をマイアーが、マーラーがリュッケルトの詩を「簒奪」した証拠として挙げているので、二人の議論はかみ合わない。

議論をかみ合わなくしているのは、ふたりが、マーラーのすべての作品においてマーラーの詩に対する態度を同一化するという単純化をしてしまっているからであろう。第２交響曲におけるクロプシュトックの宗教詩のマーラーによる世俗化や第８交響曲の『ファウスト』からの場面の取り扱い等と日常的な題材であるリュッケルトの作品を同じ次元で議論することには、そもそも無理があるのではないか。リュッケルトの『子供の死の歌』（Kindertotenlieder）も、リュッケルトへの先入観から、解釈上、巻き添えになった作品に違いない。

子供の死は、マーラーの時代もリュッケルトの時代と同様に日常的な出来事であった。日常的かつ人間の根源的な共通したテーマであった。アルマ・マーラーは、回顧録『グスタフ・マーラー』に「子供を持っていなくともあるいは子供を亡くしていたとしても、このような恐ろしいテキストに作曲することを、私は理解できるでしょう」[17] と述べている。マーラーは、５曲からなるリュッケルトの詩による『子供の死の歌』を書いた４年後 1907 年に娘マリア４歳をリュッケルトの子供と同じく猩紅熱で失ったが、マーラーが自分の子供の死を予感して作曲したというのは、アルマの創作であろうが、病気による子供の死は自分の周りで誰にでも起こることが予感され得ることであった。マーラーは６人の兄弟たちを、子供の時にすでに亡くし、そのなかには３歳下の弟エルンストも含まれていた。エルンストはリュッケルトの『子供の死の歌』のなかで悼まれるリュッケルトの五男と同じ名前である。

生涯のところでも書いたが、リュッケルトは、1788 年に生まれた。1790 年に唯一の男の兄弟 Heinrich（†1818）、1791 年に妹 Sabine Sophie（†1848）が生まれる。その後、父親が役人として赴任した Oberlauringen でリュッケルトの妹たち Anna Magdalena（1793-95）、Ernestine Helene（1795-97）、Susanna Barbara（1797-1801）が、その後 Maria Ludovika（1810-1835）生まれるが、Maria Ludovika を除くといずれも生まれて２、３年で亡くなっている。この記憶が

15　Peter Horst Neumann: Gustav Mahler und Friedrich Rückert - eine Mesalliance? Ergon Verlag. 2007.
16　Natalie Bauer-Lechner: S.166.
17　Alma Mahler-Werfel: Gustav Mahler -Erinnerung. Fischer Taschenbuch Verlag. 2011. S.90.

リュッケルトに生涯、暗い影を投げることになる。

1821 年にルイーゼ Luise Wiethaus-Fischer（1797-1857）と結婚して、10 人子供を得た。リュッケルトの子供は、全部で 10 人。最初の息子 Heinrich（1823-1875）。次男 Karl（1824-1899）。三男 August（1826-1880）。四男 Leo（1827-1904）。五男エルンスト Ernst（1829-1834）長女ルイーゼ Luise（1830-1833）六男 Karl Julius（1832 生後 3 日で死亡）。次女 Marie（1835-1920）。七男 Fritz（1837-1868 士官）。三女 Anna（1839-1919）。六男 Karl Julius が生まれてすぐに死んでいるのを除くと、五男エルンストと長女ルイーゼの早すぎる死が目をひく。1833 年の大晦日から 1834 年の 6 月末に書かれた 563 の『子供の死の歌』が成立する要因となった猩紅熱によるふたりの子供の死である。この出来事の推移については、次に紹介する妻ルイーゼの手記が新全集で刊行されるとともに明らかになった。[18]

*

私のために以下のことを書きたいのではない。なぜなら私の心には消しがたい文字でつらい日々が刻まれているからだ……そうではなくお前たち残った子供のために書く……そこから、いかに忠実に母の心がお前たちから離れることはないのがお前たちはわかる。なぜならふたりの先に行った者を悲しむように、（もしそのような状況だったら）お前たちのひとりひとりを悲しんだであろうから……

彼らが楽しみにして待っていたクリスマスイブの二日前、朝、小さなルイーゼ（母と同名の長女）が夢を見たと言った。何十万もの天使と一台の黄金の馬車が来て、一本のロープを下ろし、そのロープを伝って彼女は彼らのところに上って行ったという。

私は今頃の時期に、素晴らしいものを良い子たちに運んでくるクリストキント（子供に贈り物を運んでくる天使）のことをよく話したから、私の浅はかな考えは、それがこの夢を見させたのだと思った。この夢は今、彼女が天使になったという証明となった。

クリスマスイブにはたくさんの楽しみがあった……私は皆の望みをかなえようとしていた……特に一番小さいふたり（亡くなるルイーゼとエルンスト）の望みを。皆はそれぞれのことをやっていた。そこにエルンストがとても喜んで飛びつき私を抱きしめキスをした。お母さんと彼は言った。これが彼の感謝であった……

最初の祝日に、彼女（娘）は人形を新しいゆりかごでゆすって、寝かしつけた。私はベッドをきちんと直すことができるかと彼女に聞いた。すぐに彼女はかわいらしい手で寝具をきちんと手際よく整えた。代母が彼女にプレゼントを持ってきて、彼女のことを良くないようだと言った。私たちはそうは思わずただ彼女を外に出さない程度にしか心配しなかった。クリスマスの

18　Friedrich Rückert: Friedrich Rückerts Werke Histrorisch-kritische Ausgabe. Kindertotenlieder und andere Texte des Jahr 1834. Wallstein Verlag. 2007. S.549-558.　母の手記の文中におけるカッコ内の注は、渡辺による。

前の水曜日猩紅熱で寝ていたアウグストは、起き上がり、子供部屋に行った。……

……祝日２日目、朝10時、彼女（ルイーゼ）は居間の方へ行った。おそらくそこで私を探していた。エルンストは、彼女を敷居のところで抱きしめ連れてきた、彼は自分のルイーゼは、今日は怒りっぽいと嘆いた。私は彼女をソファーに寝かし、最後に靴と襟をとり……ベッドに寝かせた。彼女は、すぐに現れた発疹で赤く、汗をかいて、激しく息をしていた。食後に医者が来た。夜にはひっきりなしに水を飲んだ。翌日は、私が一瞬でも外に出ると、私を呼んだ。水に浸したビスケットを半分食べた。私がもっとあげようとすると、私を不安にさせる声でもういらないと言った。それは私の耳にいつも響いている声だった……彼女はよくやさしく私やおとうさんをなでた。しかし、彼女に薬を与えるときは大変だった。彼女は口をあけず、力ずくでやらねばならない。夜には水を飲み続ける、いつも少しずつ。日曜には蛭を胸におく（悪い血を外に出して治療する瀉血療法の一種)、しかし呼吸は楽にならない。私の心は、ますます重くなる。……月曜にはますます呼吸が弱くなる。気管がふさがったように見える。……彼女は死と戦った……

夜の12時に父（リュッケルト）は愛する娘と別れを告げた。「最後のラッパが響くとき、墓は開き使者たちは蘇ると黙示録にある」でもお前たちは、この別れの悲惨な響きを私の墓の上で聞かせてもよい、ならば私はすぐ蘇るでしょう。もう一度その悲惨な響きを18日後に聞かねばならなかった。ああ慈悲深い神よ、これが最後にしておくれ。さようなら、さようなら、私のかけがえのない愛する娘よ。お前は私たちのもとにいる、お前はまだ私たちのものだ、彼は叫んだ、そして神に頼んだ：彼女の愛すべき顔が、死によってゆがめられないように、そしてそれを神は満たしてくれた。わずかな苦悩の表情が病気によりかわいらしい口元に残りはしたが。父は、部屋を出て行った。彼は疲れすぎていた。私はまだのどに管を刺し、近くに獣脂の光をおいた。私はまだ希望を持っていた。夜の２時に、私の口から薬をあたえた。15分後にもう一度。２時半に彼女は最後の息をした。悲惨な６週間のように、どうやって私はこれを耐えることができたか。……３年半、私の愛する娘は、私の喜びの天使だった。人生の天使と私はお前を呼んだ。喜びだけで苦労はほとんどなかった。なのに、私はこの３年半に、あれやこれやと苦情をいい、他の人を苦しめ、自分にたくさん悪いことがあると感じることができた。私は愚か者だ。もし私がお前たち愛する魂を再び持てるなら、私は自分をもっとも幸福な者だとみなし、すべての人に対し善良で忍耐強くありたい、お前たちを再び得るために、毎日を大きな苦悩を持って私の心の血のしずくをお前たちのために絞ってもらえと言うならば、喜んでそうさせるでしょう。

彼女の一番好きな白いドレス、それを着ていると花嫁といつも呼ばれたが、それを私は今彼女の永遠の花嫁衣裳に仕上げる。そのとき多くの涙がその上に落ちた。友達のツェレナーのミルテの冠が、彼女の額を飾る。彼女は花でおおわれた、代母の……乳母、私、おばあちゃん、見知らぬ人によって、そのうえ二つの見事な赤いヒアシンス、それを以前喜びを持って子供たちのいるところで植えたのだが、それはまさに花が咲いていた。そして彼女のために、それを

胸に挿した、そして天使の花嫁のように彼女はそこに横たわっていた。12 月 31 日の朝、彼女は私たちから別れをつげた。

古い年よ、新しい年よ、おまえのことを私たちは思う。

1834 年 1 月 3 日朝 9 時彼女の綺麗で、愛する小さな体は苦悩と愛と感謝の私たちの熱い涙のなかで安らぎのために運ばれた。なぜなら私は彼女に優しい愛、彼女の優しい存在ゆえに感謝するからだ。そして私に彼女を送った神ゆえに。いや、それを私はまだしなかった。私は神に彼女を失ったことだけを訴えた。しかし、この二人の愛する子供の存在を得られなかったくらいなら、私は死に関する量りがたい苦痛を耐えよう。神に感謝を、私たちは従います。

ああなんたる新年だ。新年にエルンストは彼の小さなベッドの中で調子が悪くあちらに運ばれた。レオは二日前から病室にいた。しかし彼はちょっとのあいだ耳が聞こえなくなったが、猩紅熱は軽かった。それに対してエルンストは、ますます重くなった。体全体における赤みは本当に、緋色であり、彼は始終うたたねした。……私のベッドはエルンストのベッドのすぐ近くにある。これは彼の楽しみだった。お母さん、お母さんと、彼は激しくうなされて叫んだ……

……私が彼のベッドのところで泣いていると、 病気でもつれた口で「そんなに心配しないで」とやさしく頼む……そして「なぜ鐘がなっているの、誰かが埋葬されているんだ」実際には、鐘はなっていなかった。彼の迫り来る死の予感が、心をよぎった。すでに最愛の娘を差し出したのだから、神がそのような過酷さを背負わさないだろうとわが身を慰めた。

……カロリーネは、後で私に語った。頭に冷たい氷のうを載せたとき、彼は「僕をそんなに苦しめないで、僕は死ななければならないのだから」と彼が言ったと。ある午後彼は私に頼んだ、「お母さん、僕と一緒に祈って」。私は彼に向って祈りを唱えた。心の底から。ただ回復を祈って。彼はもつれる口でしかし正確に後をつけた。……主よ、あなたの道は計りがたい。しかしあなたの意思なくてはわれらの頭から髪の毛も落ちないという信仰を、ますます深く私の心に刻んで下さい。

……1 月 14 日、15 日には、もはやしゃべらなくなり、ただ時折大声で叫ぶだけだった。全く変わってしまった声での「お母さん」というこの叫びを、私はずっと聞き続けるだろう。あいかわらず、私は、神が彼を支え、私たちの熱い祈りを聞いてくれるという希望を捨てていなかった。1 月 15 日から 16 日の夜中私は苦しみに疲れ眠っていた。突然なにかが私を上に引っ張り上げるように感じた。私の視線はいつものように私の息子のほうを向いていた。彼はカロリーネの腕の中に横たわっていた……

……お父さんを私はすぐには起こさなかった。彼は 8 日前から毎日死にいく息子を見ていたのだ。さようなら、天使よ。私は、彼にルイーゼへのキスと挨拶を持たせた。彼は私の苦悩と涙を彼女に話さないでほしい。可能であるなら、彼らふたりは、熱い言いあらわしがたいそれとともに私が毎日、毎時間先立った者たちに向って私の腕を広げている憧れを感じないでほしい。彼は死んだ：1 月 16 日。朝の 3 時半に。

Luise Rückert（1833 年 12 月 31 日病死）

Ernst Rückert（1834 年 1 月 16 日病死）

父なる主よ。私がいるところに、あなたが私に与えてくれた者たちがいることを望んでいる。

……

復活祭２日目に、初めて再び教会に行った。この４分の１年に起こったことすべてが、聖歌を歌う際にまさに私の心にのしかかる、その結果激しい泣き声が私を教会にいられなくしてしまうのではと思った。しかし説教はまさに復活の説教だった。神よ、今日説教者に私のために慰めの言葉を話させて下さいとの激しく泣きながらした私の熱い祈りを神はかなえた。ヨブからの文章であった；それいらい私をしばしば慰めていた言葉：「私は知っている、私の救い主は生きていて、彼は私を後に地上から蘇らせるでしょう等々」

……古代のある有名な賢者が、彼の息子の死を伝えられたとき静かにこう答えた。「私が、いつかは死ぬ者を生んだのだということは、知っていた」。そして私の慰めは、私が生んで墓に収めたのは、ふたりの不死の者だということを私が知っていることである。

……

地上は、私が多くのものを失って以来、違って見える。このように色あせて。しかし、天はなんと違うことか、なんと豊かなことか。

……

＊

リュッケルトの妻ルイーゼのこの手記を読んだ者は、子供の死がリュッケルト家に与えた悲しみがいかに大きなものであったかがわかるであろう。医学の進歩した現代と比較して、子供

の死が当時、めずらしいことではなかったとしても、悲しみが今よりすくなかったなどということはない。リュッケルトは、子供の死によって疲れ果て、すべての日常的ないとなみにも支障を来すことになる。リュッケルトはこの悲しみを芸術に転化することによって苦悩を克服し、自分の全存在を作り直そうとする。そのために、彼は、半年間およそ25週間、子供の死を題材とした563の詩を集中的に創作した。それからようやく『子供の死の歌』の取り組みへの集中から抜け出すことができた。言いかえれば、日常生活へ戻ることができたのである。妻の希望に従い、この作品の出版を彼は断念した。[19] 詩の書かれた原稿の包は妻に贈られ、彼の死後6年後にようやく遺稿として世に出された。さらに30年後に、マーラーがそのうち5つの詩を選んで作曲した。

リュッケルトの作品には、個人的なものから人間全体へ、特殊なものから普遍的なものへの視点の変化がみられる。マーラーが、彼の同名のツィクルスの最後の曲に置いた『こんな天気のときに』（In diesem Wetter）の詩には、子供を嵐のときに外に出して死なせてしまった父親の後悔が書かれている。

In diesem Wetter, in diesem Braus,
こんな天気の、こんな荒れたときに、
Nie hätt' ich gesendet die Kinder hinaus;
けっして私なら子供たちを外にだしたりはしなかった、
Man hat sie getragen hinaus,
彼らを誰かが外にだしてしまった、
Ich durfte nichts dazu sagen.[20]
私はなにも言えなかった。
……

夫人の手記からもわかるように、内容はリュッケルト家の現実から離れ、架空のドラマに変更されている。作品に占めるフィクションの部分の割合が多くなり、出来事は匿名として表現される文学作品としての完成されている。しかし、ここにたどり着くまでには長い道のりがあり、それまでは、リュッケルトの苦悩そのものを詩で表現する試みの連続であった。家庭の喜びを歌ってきた『愛の春』などからのそれまでの方針をリュッケルトは転換せざるを得なかった。

19　その後、ときおりよみがえる子供の死への記憶から成立作品、『(印刷されていない）子供の死の歌への11の補遺』等を『Der Deutsche Musenalmanach』等に少数出版している。

20　Friedrich Rückert: Friedrich Rückerts Werke Histrorisch-kritische Ausgabe. Kindertotenlieder und andere Texte des Jahr 1834. Wallstein Verlag. 2007. S.416.

『私の家庭の歌集には』In meine häuslichen Lieder

In meine häuslichen Lieder,	私の家庭の歌集には、
Das Tagebuch meiner Lust,	私の喜びの日記には、
Schrieb ich mit Freuden bewusst	喜びを持って意識的に
Nur Freudengewinnste nieder,	ただ喜びで得た最善のものだけを書き留めた。
Nie schrieb ich einen Verlust	失ったものは決して
In meine häuslichen Lieder.	私の家庭の歌集には書き留めなかった。
In meine häuslichen Lieder	私の家庭の歌集に
Schreib' ich nun euern Verlust.	今お前たちを失ったことを私は記す。
So hat sich schließen gemusst	このようにして帳簿はとじられねばならなかった、
Die Rechnung! und wohl nicht wieder	そしてふたたび
Schreib' ich sobald eine Lust	私は喜びを
In meine häuslichen Lieder.[21]	私の家庭の歌集に書きこむことはないだろう。

リュッケルトは、紹介した経歴からもわかるように子供のころに妹たちを亡くした。悲しみは、その過去の記憶にさかのぼり、父親になった今の子供を亡くした悲しみと重なり、未来の孫を失う恐れの予感にまで時間を超えて広がる。『子供の死の歌』では、死んだ二人の子供のうちでは娘のルイーゼが歌われる詩が多いが、これは、同じように幼くして死んだ三人の妹たちの思いと関連しているのであろう。

『子供の時の私の最大の幸福は』Als Knabe war mein größtes Wohlbehagen

Als Knabe war mein größtes Wohlbehagen,	子供の時の私の最大の幸福は、
Ein Schwesterchen im Arm zu tragen,	ちいさな妹を腕に抱いて連れていくことだった。
Geflüchtet aus der engen Stub' hinaus,	狭い部屋から逃げ出し、
Im weiten Garten hinter'm Haus.	家の後ろの広い庭へ。
Doch hatte bald der Tod mein Wohlbehagen	しかし死が私の幸福を
Mir aus dem Arm zu Grab getragen,	私の腕から離し墓へ連れて行った。
Und in des Lebens Braus vergaß der Knab	そして人生の喧騒の中でこの子供は
Das Schwesterchen im stillen Grab.	静かな墓の中の小さな妹を忘れた。

……

21　ebd. S.17.

Inzwischen hatt' ich, größres Wohlbehagen,	その間私は小さな娘を腕に抱くという
Ein Töchterchen im Arm zu tragen,	より大きな幸福を持っていた。
……	

Nun hat der finstre Störer im Behagen,	今や陰鬱な妨害者、死が愉快に
Der Tod, auch dieß davon getragen,	それらの中からこの者を抱いて連れ去った。
Und an des Herzens leergewordnem Platz	そして心の空虚になった場所で
Was ist zu hoffen für Ersatz?	代わりに何が期待できるだろうか。

Soll ich noch mit Großvaterwohlbehagen	私は祖父の幸福をもって
Im Arm ein Enkelinnchen tragen?	腕に小さな孫を抱くべきなのか？
Ich fürchte, der die Beiden hat geraubt,	私は、二人を奪った者、
Daß er das Dritte nicht erlaubt.	死がこの三番目の者をも
	容赦しないことを恐れる。

Ich fürchte nicht, daß er mit Unbehagen	私は恐れない、死が不快にも
Das Enkelinnchen fort wird tragen;	小さな孫をつれさることを。
Er selber wird zuvor mich führen ein	死はその前に私を
Zu Schwesterchen und Töchterlein.	小さな妹や娘のところにつれていく。

Von Beiden welches werd' ich mit Behagen	二人のどちらを私は幸福にも
Am liebsten dort im Arme tragen?	この腕に抱くのだろうか。
……[22]	

『私はお前を愛していた、私の小さな娘よ』（Ich hatte dich lieb, mein Töchterlein）では、日常生活において、あるいは死をもたらした病気の折に、娘のルイーゼに対してとってしまった自分の厳しい態度への後悔が表現されている。娘を救いたいためにとった行動だとしても、娘が死んだ後、自分の行動を振り返り、助からないのがわかっていたらもっと優しくすべきだった、治療のために無駄な苦しみを与えるべきでなかったとの感情を持つことは、誰にでも共通のものであろう。リュッケルトの妻の手記にみられる素朴な感情を、詩で表現したものである。

Ich hatte dich lieb, mein Töchterlein!	私はお前を愛していた、私の小さな娘よ！

22　ebd. S.68f.

Und nun ich dich habe begraben,	そして私は今お前を埋葬する。
Mach' ich mir Vorwürf', ich hätte fein	私は自分を非難する。私が
Noch lieber dich können haben.	もっとお前を愛することができたはずだと。

……

Zuoft verbarg sich hinter der Zucht	あまりにも、規律の背後に
Die Vaterlieb' im Gemüthe;	父の愛が気持ちの中に隠されていた；

……

O hätt' ich gewußt, wie bald der Wind	おお私が知っていたら、いかに早く風が
Die Blüt' entblättern sollte!	その葉を落とすことになるかを。
Thun hätt' ich sollen meinem Kind,	私は私の子供に、
Was alles sein Herzchen wollte.	私の心が望むことすべてをするべきだった。

……

Du trankst das Bittre, wie reut michs nun,	お前は苦いものを飲んだ、
	それが私を後悔させるのだが、
Weil ich dir sagte: trinke!	私が飲めと言ったから。

Dein Mund, geschlossen von Todeskrampf,	死の戦いによって閉ざされたお前の口、
Hat meinem Gebot sich erschlossen;	それは私の命令に従って開いた。
Ach! nur zu verlängern den Todeskampf,	ああ、死の戦いを長びかせるためだけに、
Hat man dirs eingegossen.	お前の口にそれを注いだのだ。

Du aber hast, vom Tod umstrickt,	お前はしかし、死に絡みつかれながら、
Noch deinem Vater geschmeichelt,	まだお前の父をうれしがらせた、
Mit brechenden Augen ihn angeblickt,	曇りゆく目で父をながめた、
Mit sterbenden Händchen gestreichelt.	死にゆく小さな手でなでた。

Was hat mir gesagt die streichelnde Hand,	この手はなでながらなにを私に言ったのか、
Da schon die Rede dir fehlte?	もう話すことが
	お前にはできなくなっていたときに。
Daß du verziehest den Unverstand,	お前は、よきと思いながらもお前を苦しめる
Der dich gutmeinend quälte.	この無分別を許したと言いたかったのか。

Nun bitt' ich dir ab jedes harte Wort,	今、私はお前にすべての過酷な言葉を詫びる、
Die Worte, die dich bedräuten,	お前を脅かした言葉を。
Du wirst sie haben vergessen dort	お前はその言葉を
	あそこでは忘れてくれていてほしい、
Oder weißt sie zu deuten.[23]	あるいはその言葉の
	本当の意味をわかっているのかもしれない。

しかし、絶望のなかで自らに救いを求めるためには、文学の特徴である永遠化の機能が彼には必要であった。『今ようやく私はわかったのだろうか』（Hab' ich jetzt erst eingesehn）という詩では、詩つまり歌の中で失った者に生命を与え続けようとする意思が表明されている。

……

Und im Liede soll es stehn,	歌の中にそれは記されるのだ
Daß ein Schönstes lebte	一番美しいものが生きていたと言うことが、
Und mir leben jeder Frist	私にとってどんな時も
Soll es im Gesange.[24]	それは歌の中に生きるのだ。

……

またある詩において、花と花冠で子供の遺体は覆われたが、花や花冠はすぐ朽ちる、春になれば墓には花が咲くが、それもだれの目にも気付かれずに萎れると書いた直後に、詩には朽ちることのない永遠の記念碑としての花の役割があると宣言する。

……

Dein Vater aber, der sich nennt ein Dichter,	自分を詩人と称するお前の父はしかし、
Er möchte dich, und dauerhafter, krönen	彼はお前をずっと冠で飾りたい。
Sein ganzes Leid für dich in Kränze flicht er.[25]	お前のために父の全苦悩を冠に彼は編む。

……

しかし、自分の子供の死を題材として歌うことつまり詩作することには、詩作することの喜びとともに、冷めた目で現実から距離を置き、現実を作品に利用する行為に対する罪悪感が必然的に伴う。ましてや作品は商品となるのだ。このことが、『子供の死の歌』の自分の生前で

23 ebd. S.64f.
24 ebd. S.21.
25 ebd. S.37.

の出版を、最終的にはリュッケルトに断念させた原因であろう。

『私はそれが冒瀆であったと恐れる』(Ich fürcht', es war Entweihung)

……

Kommt an mit Sündenlohne	罪の報償と一緒に
Der neuste Almanach.	最新の年鑑[26]が到着する。
Das Honorar, das reiche,	謝礼、たくさんの謝礼、
Das man dem Vater gab,	おとうさんがもらった謝礼、
Reicht, um der liebsten Leiche	愛する遺体にちょうど
Zu kaufen grad ein Grab.	墓を買うには十分だ。
Und hab' ich mich versündigt,	私は罪を犯したのか、
Daß statt des Herzens Schlag	私の心を苦しめていることを、
Der Harfe Schlag verkündigt,	心の響きの代わりに
Was mir am Herzen lag?	ハープの響きがそれを告げるという罪を。

……

……

Sei nun das Leid gesungen,	今苦しみは歌われるがよい、
Und ob es Sünde sei.[27]	それが罪であれ。

「ハープの響き」とは、もちろん詩のことである。ロマン派の詩人にとって、詩と歌は同義語であり、文学と音楽も理念上は同義語に近い。最後に、「今苦しみは歌われるがよい、それが罪であれ」と詠まれたように、ここにおいてもリュッケルトは苦悩に打ち勝つ機能を詩に期待している。

『喪失の中で手に入れること』(Im Verluste zu gewinnen)

Im Verluste zu gewinnen,	喪失の中で手に入れること、
Ist ein schwieriges Beginnen,	それは困難なスタートである。

26 》Deutscher Musenalmanach für das Jahr 1834《シャミッソー(A. v. Chamisso)やシュヴァープ(G.Schwab)による文学年鑑。1833 年 12 月出版。ここにリュッケルトは、いくつかの詩を発表している。

27 Friedrich Rückert: Friedrich Rückerts Werke Histrorisch-kritische Ausgabe. Kindertotenlieder und andere Texte des Jahr 1834. Wallstein Verlag. 2007. S.23.

Und gelinget andern nie	そしてそれは
	愛と詩心（ポエジー）以外のものでは
Als der Lieb' und Poesie.	うまくいかない。
Liebe läßt sich nichts entrinnen,	愛は外に流れだすことはできない、
Hat nicht außen, sondern innen;	愛は外側にはもたない、内側にもっている。
Und das Nichts, sie weiß nicht wie,	そしてこの無を、
	愛はどのようにしてかはわからないが、
Macht zum Etwas Poesie.	詩心が何ものかにする。

Nicht dahin ist, was von hinnen,	そこから、なくならないものは、
Bleibt im Sinn, nicht in den Sinnen;	心の中にあるのであり、
	思索の中にあるのではない。
Fest auf ewig haltens die	しっかりと永遠に
Beiden, Lieb' und Poesie[28]	二つのもの、愛と詩心はそれを保持している。

『つねに詩は……』（Pflegete stets die Poesie）では、

……

Freilich bist du selber krank,	もちろんお前自身が病気である。
Wenn du singst, wo Kinder sterben;	子供たちが死んでいるとき、お前が歌うなら。
Doch der Krankheit sage Dank,	しかし病気に感謝を言え。
Die dir bricht des Todes Herben.[29]	病気がお前の死の辛さを打ち破る。

子供たちの死でさえ題材として詩という作品にしてしまう自分を「病気」だと非難したうえで、詩をつくるというこの「病気」に子供の詩によってもたらされた苦悩を克服する効能を認めている。

『ヒイラギ』（Holly-Tree）[30] でも、詩が持っている二面性が歌われている。ヒイラギは動物がかじるような下の部分では、葉のとげに刺されるが、上の場所では葉は空の風や春の光や鳥の声を支えているという。『多くのものが私に与えられた』（Manches ist mir doch beschieden）においては、他人がねたむほど与えられた苦悩を、作品にすることによって、苦悩は燃え、そしてそれは冷却すると歌われている。

---

28 ebd. S.24.
29 ebd. S.30.
30 ebd. S.28.

……

Wie der Speer die Wunde heilet,	槍が傷を治すように、
Die er hat ertheilet,	槍がつけたその傷を、
Wie die Aerzt' aus Bitterkeiten	医者が苦いものから
Arzeneyn bereiten,	薬を作るように、
Und zur süßen Kost der Bienen	そして蜂の甘いごちそうに
Gräberblumen dienen.[31]	墓の花が役立つように。

苦しみの炎は詩という作品に生まれ変わることによって治まる。『いつも私は……』（Immer that ich ihren Willen）では、お前たちのお母さんがお前たちをわたしのために生んだのは無駄だったのかの問いの後、「いいえ、私はみずからに誓った ／ これからも詩作し続けること、／ そうすれば私にはなにもお前たちの生をなかったものにはできない。」[32] と、詩作することによって子供たちの生を永遠に保つことができるという。このように、苦しみを歌うことによって、苦しみを乗り越えるという作業が集中的に行われたのである。言語への造詣や東洋への文学の愛着、当然ことながら愛国詩人としてのリュッケルトを超えた人間の共通の感情が表現された作品となったのである。ただし、これもリュッケルトのひとつの面ではあるが。

（本学准教授＝ドイツ語担当）

31　ebd. S.25.
32　ebd. S.29.